

小麦栽培活動を通して学ぶ自然と共生した食農保育の実践

鈴木里香*

岐阜女子大学

(2022年9月9日受理)

Practice of Food and Agriculture Childcare that Coexists with Nature Learned through Wheat Cultivation Activities

Gifu Women's University

SUZUKI Rika

(Received September 9, 2022)

害獣の被害を経験することで自然の厳しさを経験したり、自生している植物を収穫し自然の恩恵を受けたりする経験は、「命は自然のなかで育つ」という認識を育てることが示唆された。虫を殺すのではなく寄せ付けないことをねらいとした農薬を手作りすることで、他の生き物の命について自分と重ねて捉えることも示唆された。そして、保護者も子どもが得た感動や発見と一緒に分かち合うことで、家庭における食生活もより豊かになることが期待されたので報告する。

〈キーワード〉食農保育、小麦、鹿、郷土のお菓子、みょうがほち

1. はじめに

日本の様々な伝統行事は、そのほとんどが農耕儀礼であり国民は常に五穀豊穡を祈りながら生きてきた。また、日本語には雨、風、空、雲など気象に関する多くの単語が存在し、雨だけでも数百語と存在する。それだけ人々は自然を注意深く観察し、自然に生かされているという精神のもと自然の脅威にさらされながらも様々な恩恵を受けてきた。

持続可能な社会の創り手を育む教育 ESD

* Suzuki, Rika : 岐阜女子大学
e-mail= rikas@gijodai.ac.jp

において、SDGs にみられる問題解決につながる新しい価値観や行動等の変容をもたらす学習や教育活動が求められる。国連の提唱した「誰ひとり取り残さない」という理念を保育の現場で実践するためには、「自分の命も、他者の命も大切にすべきもの」「命は自然の中で育つもの」という認識をもった人を育てる作業が重要になってくると思われる。¹⁾

そんな命を支える食べ物は自然の産物であり、動物の一員である人間も他の生き物の命を食べることで自らの命を維持している。自然豊かな本学における食農保育の実践活動を報告する。

2. 食農保育の実態

「楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～」では、発育・発達過程に応じて育てたい“食べる力”として、幼児期～食べる意欲を大切に、食の体験を広げよう～には、「栽培、収穫、調理を通して、食べ物に触れはじめる」「家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わう」として位置付けている。²⁾

また、心身の発達時期にある幼児が、多くの生命に接しその大切さを心で感じ、作物を育てる楽しさを知ってもらうことをねらいとし、岐阜県は「岐阜県食育基本条例」において、「幼児食農教育プログラム」を実施している。活動のポイントとして、「農産物を育てるには、水やりや草取りなど世話をする必要があることを知る。」「農業は自然を相手にしており、自然は人の思うようにいかないものであることを知る。」と農作物の栽培体験に位置付けている。³⁾

保育所保育指針には、「子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や食の循環・環境への意識、調理する人への感謝の気持ちが育つように、子どもと調理員等との関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること。」とある。食べ物が自然の恵みからできた生物であることを実感し、行事食や郷土食を取り入れることで食文化に触れ、育てることや生きることについて考えることが大切である。2019年に岐阜女子大学農業研究会（以下、農研と記載）は、「子ども農業活動」を立ち上げた。農研には、岐阜女子大学初等教育学専攻と健康栄養学科の学生が所属した。

保護者にも子どもが得た感動や発見を一緒に分かち合い、子どもとのコミュニケーションを深めながら家庭における食生活の実現も期待している³⁾ということから、農研は、家

族単位で募集を行った。その結果、17名の幼児を含む10組の家族が参加して活動をスタートした。

3. 子ども農業活動

農研では、2019年より地域の10組と「子ども農業活動」を進めてきた。2019年度のサツマイモ活動では、苗植えや収穫以外の草取りや蔓返し等の世話をを行う栽培過程にも重点を置いた。農業研究会で収穫したハツシモの粃殻と学内で拾い集めた落ち葉を使って、焼き芋パーティとして焼きたての収穫したサツマイモを食した。さらに刈った蔓を丸めて乾燥させ、クリスマスリースを制作した。

2020～2022年度の小麦栽培活動では、新型コロナウイルス対策を徹底して、2年継続の活動を行った。活動内容は次のとおりである。

2020年11月 小麦種播き

2020年12月 観察会としめ縄作り

2021年1月 観察会とどんど焼き

2021年5月 殺虫効果のある農薬作り

2021年6月 小麦収穫

2022年5月 みょうがぼち作り

(1) 虫との関わり

農研が行っている稲作では、2019年5～7月にかけて水田にてハウネンエビが大量発生した。しかし新しい薬剤を使用して田植えを行った翌年2020年、代掻き後に発生していたハウネンエビが全滅してしまった。生物への殺虫剤の強さを実感し、小麦活動のカメムシ対策では殺虫剤は化学薬品ではなく、入手可能な食材を中心に調合することとした。唐辛子、ニラ、生姜、ニンニク、コーヒー殻、茶殻、よもぎ、生姜、をすり鉢でよくすりつぶし、焼酎、酢、牛乳と煮詰めて霧吹き器詰める際には、鼻の奥を刺すような強い臭いに子

どもたちは驚いていた（写真1）。虫を殺して作物を守るのではなく、寄せ付けないことで作物を守る方法について、「これなら虫は逃げていくね」「僕がカメムシなら臭くて近づけない」と口々に呟きながら霧吹きに入れた農薬を吹きかけていた（写真2）。



写真1 農薬を煮詰めて調合



写真2 手作りした農薬を吹き掛ける

（2）鹿との関わり

12月上旬、発芽し10 cm程度に育った苗は、鹿によって3 cm程度に短く噛み千切られ、日に日にその範囲は畑内に拡大した（写真3）。鹿対策で用務員の男性職員に手を借りながら学生間で高さ1mのネットを張るが、1週間後には畑内で足跡を確認。飛び越え、畑内に入られてしまった。急遽観察会を開催し、苗や鹿の足跡を確認した（写真4）。

（3）みょうがの葉との関わり

みょうがの葉に包まれた郷土に伝わるお菓



写真3 鹿に噛みちぎられた小麦の苗



写真4 学内に現れた鹿の様子を視聴

子として、農作業の合間におやつとして食べられてきた宮城県北部の「みょうがの葉焼き」は、小麦粉・味噌・砂糖で作られる。農繁期の慰労の意味も込めて農休日に食べる高知県おおとよ町「半夏だんご」は、小麦粉・あんこ・砂糖で作られる。岐阜県の「みょうがぼち」はそら豆で作った餡を小麦粉で包み蒸して作る。

岐阜女子大学敷地内では、西芝生広場のと竹藪を隔てる池のほとりにみょうがの葉が育つ（写真5）。また、所有している水田の脇にも確認している。2022年5月には、子どもたちが収穫した小麦とみょうがの葉を使って、みょうがぼちを作ることとした。

長屋ら（2002）は岐阜県内の4地区（岐阜地区、東農地区、性能地区、飛騨地区）にお



写真5 学内のみょうがの葉収穫

いて、豆類を使った料理について調査を行った。結果、みょうがぼちを食べていた家庭は、岐阜地区（巣南町、岐阜市）と西濃地区（大垣市）に見られ、東濃地区及び飛騨地区ではみょうがぼちは食べられていなかった。このうち岐阜地区の家庭で食べられているみょうがぼちに用いられるそら豆についても、岐阜地区ではすべてが自家生産であった。餡となるそら豆の生産に適していたという地域性が影響していると推測している。⁵⁾

岐阜県本巣郡巣南町をはじめとする岐阜地区では、6月の終わりごろから8月にかけてそら豆を使った「みょうがぼち」が作られ、これは岐阜県内でもこの地域とその周辺部で食べられている。

これらみょうがぼちに関する内容を手作り絵本にまとめ、調理することとした。保護者からは「小麦とそら豆とみょうがの葉で作るみょうがぼちがこの季節ならではのものを初めて知った。」「大学には自然も多く、子どもがゲームやTVを観ることとは違った目の輝きをして季節を感じとっていたと思います。」「皆で話をしながら作業をすることは楽しいと活動に興味を持っている。」「活動を通して野菜をよく食べたり残す日が少なくなってきた。」「日本の文化のことも学ぶことができ、子どもも食の関心を高めることができ

た。自分たちも子どもと共に学んでいけたら。」と子どもの食への関心が深まるとともに保護者の意識にも変化があることがわかった。

4. おわりに

高橋ら（2021）は、ニワトリ飼育の実践事例をもとに、「食農自然保育」の教育的効果を考察し、「食農自然保育」は「生きること」の学びそのものであり、認知能力といわれる「社会情動的スキル」が生まれることが示唆された¹⁾と述べている。

「子ども農業活動」を通して、害獣の被害を経験することで自然の厳しさを経験したり、自生している植物を収穫し自然の恩恵を受けたりする経験は、命は自然のなかで育つものという認識を育てることが示唆された。また、害虫として虫を殺すのではなく寄せ付けなことをねらいとした農業を手作りすることで、他の生き物の命について自分と重ねて捉えることも示唆された。そして、保護者も子どもが得た感動や発見と一緒に分かち合うことで、家庭における食生活もより豊かになることが期待された。こけらのことから、農研の活動は、家族で「子ども農業活動」に参加してもらうことで、虫とのかかわり、鹿とのかかわり、みょうがの葉とのかかわりを通して、「社会情動的スキル」が育つと考えている。

教員養成課程では、未来を見据えてその自覚を持ち、幼児教育が展開できる幼稚園教諭・保育士を育てていく必要がある。自然のなかで作物を育てることで思い通りいかない経験は、より自然の恵みを感じることに繋がり、自分や他者の命を尊重する経験となる。学生が主体的に農研の活動を行うことで、体験を通して、保育者としての多くの知見を得るこ

とができる活動であると考ええる。

参考文献

- 1) 生命の価値に触れる自然体験教育のSDGsの視点からの考察～乳幼児期における「食農自然保育」の意義について～（2021）高橋健司，久保田秀明，創価大学教育学論集第73号 pp 189～205
- 2) 楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～（平成16年2月）厚生労働省雇用均等・児童家庭局
- 3) 幼児食農教育プログラム改訂版2013（2013）

岐阜県

- 4) うちの郷土料理（HP）農林水産省
- 5) 岐阜県における豆の利用―「みょうがぼち」の地域性を中心に―（2002）長屋郁子，福田美津枝，山となつみ，小川宣子

謝辞

稲作研究会の活動をご支援してくださった長屋増一様，深尾秋義様をはじめとする用務員の皆様，三輪南農産の深尾英雄様，製粉機をお貸しくださった各務原幼稚園の寺本純子様，活動に参加してくださったご家族の皆様に心より感謝申し上げます。

